

モーツァルトの幻想曲について

伊藤 充子

Mozart's Fantasia

Mitsuko ITOH

緒 言

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart 1756—1791) 35年の生涯で、ピアノ独奏のための作品は、多岐にわたっている。例えば奏鳴曲19曲、変奏曲16曲、幻想曲5曲などの作品が挙げられる。ザルツブルグとの決別の後、1781年から始まるウィーンでの作曲活動の中で、ヨハン・セバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach 1685—1750) などの影響を受けながらも、彼独自の自由な表現をもった、優れた作品の1つである幻想曲K. 475を中心に、幻想曲の成り立ちについて概観し、モーツァルトが作曲した5曲について考察したい。

幻想曲の成り立ちについて

幻想曲は、一般的に次のように規定されている。即ち、定旋律にとらわれることなく、楽想のおもむくままに一定の拍節や形式にとらわれず作曲された作品で、構造も変化に富み、自由に展開する即興的な様式の楽曲であるとされる。

まず、幻想曲と深く関わりのある即興演奏について述べてみたい。16・7世紀において即興演奏の方法は2通りの方法があった。1つは与えられた旋律を即興的に装飾すること、もう1つは、与えられた定旋律に1つないし、2つの対位的な声部を付加することである。このような方法は器楽様式の発達を促し、更に、こうした器楽様式の発達は、前奏曲、幻想曲と呼ばれる楽曲を作り出すことになる。これらは、与えられた定旋律に基づくことなく、自由に展開する即興的な様式で、特に鍵盤楽器の作品の中に見出される。

バロック時代には、前奏曲 (またはトッカータ・ファンタジア) とフーガの結合がなされた。これは、大規模でありながら均衡のとれた音楽的構成をもつ、この時代の1つの特徴である。J. S. Bachの「半音階的幻想曲とフーガ」二短調BWV 903は、彼の豊かな想像性や対位法技法など色彩豊かな特質をもっており、この形式で書かれたバッハ最大のクラヴィーア作品の1つである。

18世紀の中頃になると、様式の上でも変化が現れてくる。それは多感様式 (empfindsamer Stile) と呼ばれ、カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ (Carl Philipp Emanuel Bach 1714—1788) に代表される前古典派時代に象徴されるものである。この様式は、音楽を表情豊かにするものであり、特に鍵盤楽器の作品において、より顕著にあらわれている。C. P. E. Bachは、J. S. Bachの息子の1人であり、古典様式の創始者と呼ばれている。彼は、感情を自然に表現するという多感様式において、ソナタ形式、半音階的手法などを確立した。彼のファ

ンタジアの作品は、対話風の楽句をとり入れることによって、より即興性の強いものになり、多様な転調を作り出している。

モーツァルトに代表される古典派時代の幻想曲は、両 Bach の影響を受けていると考えられる。モーツァルトの作品については後述する。

その後、ロマン派時代における幻想曲はヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms 1833—1897) の幻想曲集 Op. 116 のように幻想的な性格をもつ小品、フランツ・ペーター・シューベルト (Franz Peter Schubert 1797—1828) の「さすらい人幻想曲」のように自作歌曲「さすらい人」の主題を全楽章用いたもの、フレデリック・ショパン (Frederic Chopin 1810—1849) の大規模な「幻想曲」へ短調 Op. 49, ローベルト・シューマン (Robert Schumann 1810—1856) の「幻想曲」Op. 17 のように形式の自由なソナタ、あるいは、特別な性格をもったソナタをあらわす名称として使われるようになる。

モーツァルトの幻想曲について

1782年、ウィーンで、モーツァルトは、ウィーンの富裕な音楽愛好家であるヴァン・スヴィーテン男爵と知り合った。彼は、バロック、前古典派の音楽に造詣が深く、その時代の楽譜の収集をしていた。モーツァルトは、毎日曜日に開かれる男爵家のコンサートに参加し、これらの音楽を深く研究することができた。この経験は、フーガ、幻想曲を生み出すことになった。

彼の作品には、K. 395 (300g) 幻想曲ハ長調《カプリッチョ》, K. 394 (383a) 幻想曲とフーガハ長調, K. 396 (385f) 幻想曲ハ短調《クラヴィーアとヴァイオリンのためのソナタ断章》, K. 397 幻想曲二短調, K. 475 幻想曲ハ短調の5曲がある。しかしK. 396とK. 397は未完であり、後に補作されている。

K. 395 (300g) 幻想曲《カプリッチョ》ハ長調 4分の4拍子

前奏曲風な Allegretto の第1部 (譜例1), Andante, Presto, Adagio, Allegro とめまぐるしく tempo がかわる第2部, 落ち着いた感じの Allegro assai のカプリッチョ (譜例2) の3部からなる。32分音符と分散和音, オクターブが多く, トッカータ風の楽曲である。

K. 394 (383a) 幻想曲とフーガ ハ短調

モーツァルト自身は、この曲を「プレリュードとフーガ」と呼んでいる。しかし、速度、様式とも自由な性格をもっている。この曲は、オーストリア帝国室司書であり、富裕な音楽愛好家であったヴァン・スヴィーテン男爵に促され、作曲されたものである。

プレリュード ハ長調 4分の4拍子

Adagio, Andante, più Allegro の3部分よりなる。

Adagio ハ短調の主和音の分散で始まる (譜例3) f と p のコントラストがはっきりした、ゆっくりな曲である。

Andante 右手減三和音の三連符, 左手分散和音の形で, d : — a : — d : — c : — Es : とめまぐるしく転調する。つぎつぎと転調しながらイ短調の主和音で終わる。

più Adagio は ♩ のリズムと上下に動く減七のアルペジオで d : — e : — a : — g : — e : と転調し, primo tempo からは, 同音の繰り返しが e — a — d — g — c — f と続く。属和音で半終止しフーガに続く。

FUGA Andante maestoso ハ長調 4分の4拍子

属音 (G) より主音 (C) へ下行し, 再び属音にもどる2小節の主題がバスに提示され, ア

譜例 1



譜例 2



譜例 3



ルトが主音からの主題で応答し、ソプラノが属音からはいる三声のフーガである（譜例4）。ストレッチ・拡大など対位法技法が使われ、最後も Adagio で和声的終結を行うなど、バッハの影響が顕著にあらわれている。

K. 396 (385g) 幻想曲 ハ短調

元来は、クラヴィーアとヴァイオリンのためのソナタ楽章である。1930年音楽学者ハース (Robert Hass 1866—1960) によって自筆譜が発見された。この自筆譜の発見により、ピアノの楽譜はマクシミリアン・シュタートラー師 (Maximillian Stadler 1748—1833) により、ヴァイオリンを省略し、幻想曲と題し完成され、出版されたことが明らかになった。1782年8月に妻コンスタンツェのために、ヴァイオリンソナタとして作曲したが、提示部だけを書き上げて未完成となった。ヘンレ原典版には、モーツァルトが書いたのを区別して出版している。

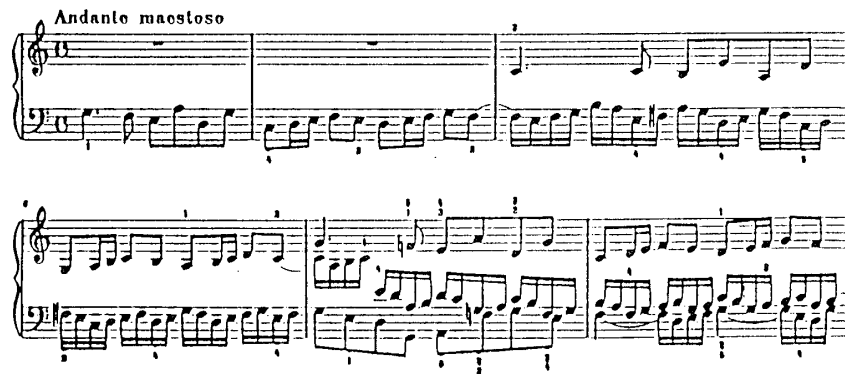
Adagio ハ短調 4分の4拍子 ソナタ形式

ハ短調主和音の分散形で第一主題があらわれる（譜例5）。決然とした第二主題が平行調の変ホ長調で続く。展開部からは、シュタートラーによるものである。再現部は第二主題がハ長調であらわれて終わる。

K. 397 (385g) 幻想曲 ニ短調

1782年、ウィーンで作曲したとされているが、この曲も、K. 396と同様に未完である。ルートヴィヒ・フォン・ケツヒェル (Ludwig von Köchel 1800—1877) が1862年に作品目録を作成した時点で、自筆譜は消失しており、「ピアノフォルテのための序曲ファンタジー、W. A. Mozart作曲 遺作断片」と初版では書かれている。この曲の最後の10小節（98小節から

譜例 4



譜例 5



107小節)は、初版譜にはなく、旧モーツァルト全集では、トマス教会の音楽指揮者アウグスト・エーバーハルト・ミュラー (August Eberhard Müller 1767—1817) の手により初めて補充された。

Andante, Adagio, Allegretto の自由な複合三部形式

Andante 二短調 4分の4拍子

分散和音による神秘的な前奏部分である (譜例6)。

Adagio 二短調

穏やかな部分 (譜例7) と、不安・焦りで心が動揺している部分 (譜例8) が交互にあらわれる。減七の分散和音が Presto でカデンツァの役割を果たしているかのようにみえる。

Allegretto 二長調 4分の2拍子

前の Andante, Adagio の暗く重々しい音楽に代わって、明るく美しい長調で表現される (譜例9)。

K. 475 幻想曲 ハ短調

この曲は、1785年ウィーンで作曲されたが、1784年に作曲されたK. 457ハ短調ピアノソ

モーツァルトの幻想曲について

譜例 6



譜例 7



譜例 8



譜例 9



ナタと一組にしてアルタリア社から出版されている。この2曲は、書籍印刷出版者であったヨーハン・トーマス・フォン・トラットナーの夫人で、モーツァルトの弟子であったテレゼに献呈された。

5つの幻想曲の中で一番充実した曲である。全体は5つの部分からなり調号はついていないが、ハ短調の主和音で始まり、同和音で終止している。

Adagio ハ短調 4分の4拍子

両手のオクターブでのハ短調主和音のユニゾンで始まる(譜例10)。この部分は、一緒に出版されているK.457のソナタの主題(譜例11)と共通の要素をもっている。

後半は、美しい旋律がニ長調であられる(譜例12)。

譜例10

Adagio

譜例11

Molto allegro

譜例12

譜例13

Allegro

Allegro イ短調 4分の4拍子

決然と左手オクターブがイ短調の属和音で始まる。右手の16分音符でのトレモロと左手のオクターブが同じ音型をゼクエンツで強調し(譜例13)、次にヘ長調の歌う部分が続く。

Andantino 変口長調 4分の3拍子

この部分のみ調号をもつ。Allegro, più Allegro(後述)の間に挟まれた、落ち着いたある間奏部分である(譜例14)。

più Allegro ト短調 4分の3拍子

最初はト短調で始まるが、調号はついていない。同じ音型で、g : — Es : — Des : — As : — Ges : — Des : — As : と転調して繰り返され(譜例15)、次第に気持ちが沈んでいくように静かになる。

tempo primo ハ短調 4分の4拍子

もとのAdagioにもどる。最後は決然とハ短調の音階で終わる。

結 語

モーツァルトの幻想曲は、彼の作曲活動の円熟期であるウィーン時代に書かれている。この

譜例14

譜例15

時代はまた、バッハ、ヘンデルに代表されるバロック音楽との出会いによって、対位法技法を学びとり、この技法を支える要素の1つである短調による幻想曲やフーガなどの作品が作られた時代でもあった。そうした時代の息吹の中で作られたモーツァルトの幻想曲の中でも、K. 397とK. 475は比較的演奏される機会が多い作品であるこの2曲の特徴は次のようにまとめることができる。

K. 397は小品でありながら、豊かな幻想を讃え、一方で、モーツァルトのもっている明るさと繊細さがあらわれた作品である。

K. 475は、バロック、前古典派の影響を受けながらも、自由さと大胆さをもち、技巧的でありながら、形式は完全に守られており、モーツァルトの個性があらわれた優れた作品である。

今後は、幻想曲K. 475と一緒に出版され、ウィーン時代最大のピアノ独奏曲の1つである奏鳴曲K. 457を含めたウィーン時代の奏鳴曲について考察したい。

文 献

- 1) 属 啓成：1975 モーツァルトⅢ器楽篇 音楽之友社
- 2) 大久保靖子他：1976 名曲解説全集14独奏曲Ⅰ 音楽之友社
- 3) 標準音楽辞典：1971 音楽之友社
- 4) 海老沢 敏：1984 モーツァルトの生涯 白水社
- 5) 海老沢 敏：1984 モーツァルト研究ノート 音楽之友社
- 6) 海老沢 敏：1988 新モーツァルト考 日本放送出版協会
- 7) 千歳八郎他：1981 ピアノ名曲の演奏解釈Ⅰ 音楽之友社
- 8) D. J. グラウド著 服部幸三・戸口幸策共訳：1971 西洋音楽史上・下 音楽之友社
- 9) S. サディー著 小林利之訳：1981 モーツァルトの世界 東京創元社
- 10) A. アインシュタイン著 浅井真男訳：1966 モーツァルトその人間と作品 白水社
- 11) MOZART Klavierstücke URTEXT G. HENLE VERLAG

- 12) MOZART Klavierstücke Piano Pieces Wiener Urtext Edition
- 13) MOZART Klavierstücke Band 2 Wiener Urtext Edition